



Judo Practice Led Me to my Lifework 柔道修行が示唆してくれた私のライフワーク

(脳性麻痺で寝たきりになっていた身障児・者と柔道の出会い)

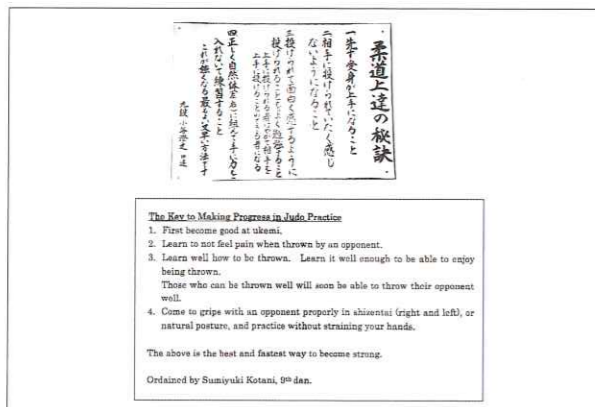
世界柔道選手権大会 2003/9/10

村井正直

小さい頃から始めていた柔道は医学生になってからも続け、柔道家になることを夢見ていたが、24歳の時、国体に出場して『二足の草鞋を履く』ことの難しさを知った。

医師になった27歳から4年間、基礎医学で研究に携わり、その後、消化器外科の道を歩むことにした。然し、柔道への想いは、研究時代も臨床医を志すようになってからも消し去ることができず、気が付いてみると、大学の医学部に柔道部を創設したり、地域の子も達と柔道の稽古をする少年柔道の道場を作ったりしていた。

特に少年柔道教室を開くに当っては講道館に小谷十段をお訪ねして子どもの柔道指導についてご示唆を頂き、『柔道上達の秘訣』を拝受した(Slide1)。私はこの誓文を稽古の前に皆で唱和している。



Slide1

練習は週4回、特に日曜日は早朝稽古とし、稽古を終えると2時間、英、数、国、社会などの復習を行った。これは嘉納師範の文武は両道の教えに従ったものである。また、遠征試合に参加する際は、自前の車を使わず、常に公共交通機関を利用することを親との間で取り決めた。それはこの機会に、

- ①地理の勉強に供すること
- ②電車に乗っても座席に座らず立位のままで電車で揺られ時々刻々変わる走行や速度の変化にすばやく対応することでbody balanceを強化することを心がけた。
- ③そして、立位をとっていることで窓外の風景や

看板の文字に精通して行くことの附加効果も求めた。

これらの行動は二次的には老人や子、女に席を譲るといふ、他人を喜ばせ感動してもらうことの嬉しさを知ることにもなった。

こうして少年柔道教室は地域の好評をうけながら5年の歳月が流れたが、或る日、寝たきりになった少年が母親に連れられてやって来た。大学病院を紹介するとC.P.という疾病であり、C.P.対策は欧米に比べて著しく貧困であることが書かれていた。さらに、治療が遅れると手足の機能が悪化して2次、3次の障害がその子を廃人同様にする、というのだ。

同じ人間に生まれてきて日本で生まれたために欧米のC.P.児に比べて大きな社会的不利を背負う日本のC.P.児の宿命を考えていると、もう居ても立っても居られなくなり、英国の専門機関を訪ねることにした。



Slide2

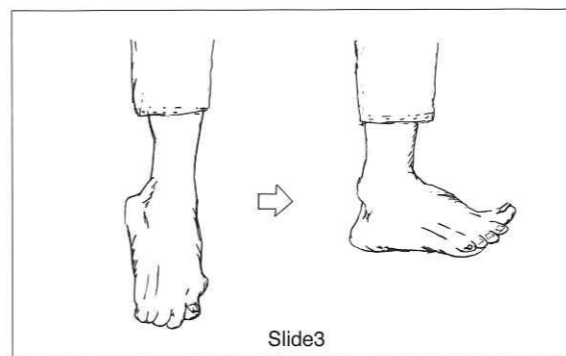
この講演会で尖足を矯正する実技が披露された。尖足とはバレリーナがtoe shoesをはいてバレエをする際の足の形(Slide 2)で、私を訪ねてやってきた少年がこの尖足があるため寝たきりになっていたので特に私の関心を引いた。

少年が立ち、そして歩けるようになるためにはSlide 3の如くなる必要がある。

我々動物には頸の前、後屈によってSlide 4-7のような全身反応があるが、イギリスの専門家の実技(Slide 8、9)はその原理を応用したものであった。

私はその実技を眺めていて、咄嗟に柔道の後方受身を利用したらよいかもしいないと思った(Slide10)。Slide11-12のように後頭部を畳から離すことができるようになると尖足はきつとなおる。もしこれが成功すれば、当時の日本のP.T.の不足という問題に対し大いに貢献できることになる。

帰国すると早速、その考えを実行に移した(Slide13)。



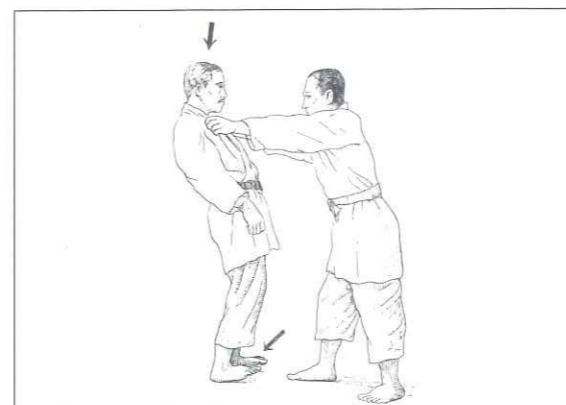
Slide3



Slide4



Slide5



Slide6

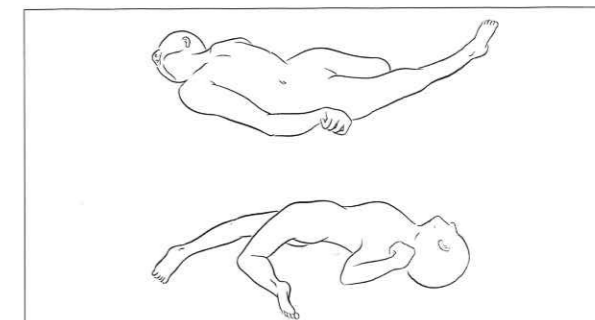
動物の行動

反射という機構により、無意識のうちに目的に合う動作を展開

II

例 頸の反射に随伴する全身の反応

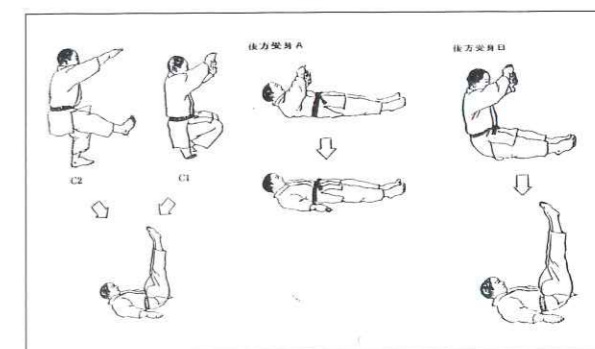
Slide7



Slide8

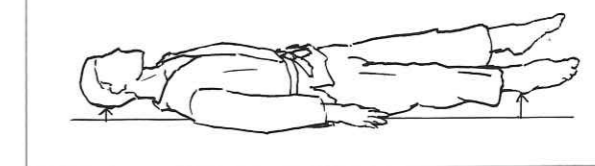


Slide9



Slide10

尖足位



Slide11



Slide12



Slide13

機能回復、柔道で

がんばる身障2少年
仲間も支援、たくましく



Slide14

この少年は1400gで生まれたC.P.児で、尖足を有していた。尖足が改善され立つことができたのは、後方受身を始めて2年後のことだ。朝日新聞が驚きの余り記事中に紹介してくれた(Slide14)。柔道の受身は見事にP.T.のピンチヒッターになった(Slide15)。私はそのとき2つの句を日記に記し

	医	柔道
とどろみ	1:1	1:多数(集団)
活動	1日45分	∞
自主性	他力本願	自力 自主性 創造性 積極性
精神症状	くらい	あかるい 模倣 競争心 社会性

リズムーかけごえ一言語が豊富

Slide15

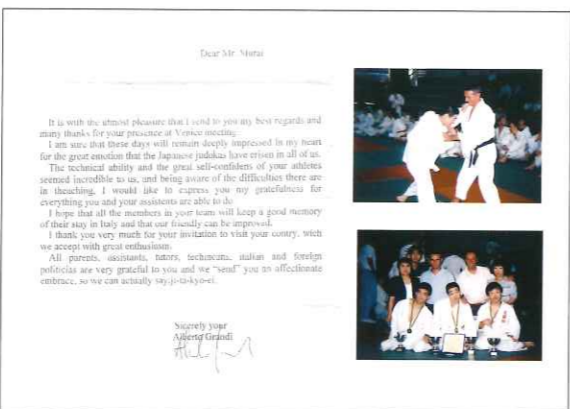
幾歳の子らの歩みは確かなり
冬越え春の旅立ちうれし

Firmer foot steps year by year, after passing winters comes joyous spring for the children to set out on a journey of happiness

この子らと苦楽の旅を共にして
学びしことのいや増し 多き

With these children we traveled far, learned from them all the more in both good times and bad times

Slide16



Slide17

た(Slide16)。1977年(S52)、26年前のことである。その感想である。その感動の日から21年目の1998年、天理大学で柔道を学んだというイタリア人ALBERT GRANDI先生からイタリアで開かれる国際障害者柔道大会にお招き頂いた(Slide17)。更にその2年後(2000年)ドイツのERIKA KLABEN女史からドイツのGRENZACH-WYHLENで行われた国際柔道大会にもお招きを頂き(Slide18)世界の障害者柔道のありようを垣間見て感動してしまった。柔道を創出した我が国のそれを凌駕した障害者柔道がそこにあったからである。



Slide18

7歳から15歳までの間に、肉体の中に自然の美が宿るように鍛えてゆけば、子どもの中に自ずと優れた人格が形成されてゆく

Slide19

嘉納治五郎の柔道
『礼に始まり礼に終わる』
明治15年6月5日
(1882年) → 120周年目

↑
(1) 福沢諭吉
身心の順是れ柔道
獸身を作り而る後人心を養う

Slide20

紀元前8~900年、ギリシャの国の義務教育の最も本質的なことは、体育の教師(gymnast)が子どもの教育をするということだった。この方針の由来は『7歳から15歳までの間に、肉体の中に自然の美が宿るように鍛えてゆけば、子どもの中に自ずと優れた人格が形成されてゆく』(Slide19)という考えに基づいている。福沢諭吉は、嘉納柔道を見聞されて『先ず獸身をつくり而る後に人心を養う格闘技』と評しておられる(Slide20)。嘉納師範門下の四天王の1人であった山下義韶十段は63歳の時、当時26歳だった私の父にSlide21のような書を送って下さった。不肖の私は、この身心自在という書の意味するものは、山下十段が、年1万回の稽古を悲願として練習に身心を投じた結果の悟りの心境を明示されたものだと考え、困難に直面した時の教典にしている。身心自在ならば、嘉納師範の『他人の不幸を我ものとせよ』という武士道精神の極地は、流れる水の如く極めてストレートに身心を自在に変容させたこ



山下義韶 十段 (10 Dan) (1923)
Slide21

新渡戸稲造
敗者に対する仁、是れ武士道(=柔道)

仁とは

- ・母の如き柔和な徳
- ・勝者の傲慢を砕き、敗者を安ずる勇猛の心
- ・寛容にして慈悲あり
- ・妬まず、誇らず、驕らず

Slide22

(Slide22)。因みに全柔連、講道館が21世紀に向かって、嘉納柔道の原点に立ち返ろうという『柔道ルネッサンス』を展開されていることに対し、柔道をこよなく敬愛している日本人の1人としてまことに時宜を得たものとして心から敬服申し上げている。

2000年シドニーオリンピックの選手村に注射針等のゴミ等の山ができ、ゴミ担当者が受傷したという報道を読んで暗い気持ちになった。禁止薬物を使用してまで金メダルを狙うというのがオリンピック精神や嘉納精神に反するからである。本日通訳をかって出て下さったアレクサンダー ベネット先生はこれらの事態に『心の育成を怠った勝利至上主義』との指摘をなされている(Slide23)。柔道ルネッサンスを機に世界中の武道家がギリシャの義務教育、オリンピック精神、そして嘉納柔道の精神に則って今一度人間育成の原点の意義を再認識して下さることを念ずるものである。私は不出来な人間で医学生の時二足の草鞋に耐え切れず柔道家になることを断念したが、身障者に会いそれが私のLife Workにまで発展していったことの原点は幼い頃からの厳しい柔道修業の賜であると思ひ、出会った柔道に感謝の日々を送っているとともに、この武士道精神が世界中の隅々まで浸透し、テロや戦争のない万物共生の美しい地球になることを願っている。

Slide21

